

コメントライナー

第6328号

2017年11月13日(月)

◎南海トラフ巨大地震、その時どうなる！

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

◆キラールパルスに備えよ

阪神・淡路大震災では約1～2秒の周期(応答スペクトル)が卓越していた。この揺れ方はキラールパルスとも呼ばれ、低中層階の建物が損壊しやすい揺れ方である。そのため、犠牲者の87.8%が建物倒壊等による圧死だった。それに引き換え、東日本大震災では約0.3～0.6秒の揺れが卓越していた。これは建物が壊れにくい揺れ方である。その結果、東日本大震災における犠牲者の約94%が津波による溺死。建物の下敷きで亡くなった方は4.4%だった。

想定される南海トラフ巨大地震は、東日本大震災の震源域(約130km沖合)よりも陸地に近い震源域(0～80km沖合)と推定され、東日本大震災と阪神・淡路大震災を併せた大揺れで多数の建物が壊れる可能性がある。現在は津波対策に重きが置かれているが、阪神型の激しい揺れに備えた対策と訓練が不可欠。震源域が陸地に近い分、東日本大震災よりも短時間で津波が襲ってくる危険性も高い。

◆310年前の巨大地震

今から310年前の1707年10月28日13時45分ごろ、南海トラフのほぼ全域の断層破壊が発生。東海地震、東南海地震、南海地震が時間差で連鎖的に動いた「宝永の大地震」である。諸説あるがマグニチュードは8.6～9.0と推定されている。震度6～7の激しい揺れは、東海地方～大阪平野、奈良盆地、紀伊半島～四国、九州豊後、日向までに及び、さらに甲斐、信濃など内陸部、また出雲など日本海側でも一部震度6以上と推定されている。その後、房総半島から九州までの沿岸に約5～17mの大津波が押し寄せた。とくに最大の津波高となったのは土佐の久礼で25.7m。この地震による犠牲者は約2万人と推定されている。当時の推定人口約1700万人からしても被害の甚大さがわかる。そして、その49日後の12月16日から富士山の宝永大噴火が始まるのである。

◆「逃げる・守る防災」と「安全な家に住む防災」

宝永の大地震とほぼ同じように広範地域に大揺れと大津波が想定される南海トラフ巨大地震。政府は11月1日から予知を前提とせず、観測機器の異常を察知した場合「臨時情報」を流す対応に変更したと発表した。つまり、予告なく突然大揺れに襲われる可能性があるということである。

従来の対策は「逃げる・守る防災」が主体だったが、高齢化が進む昨今、大揺れや短時間で押し寄せる大津波から逃げる・守ることは極めて困難である。これからは「逃げる・守る防災」だけでなく、大揺れや大津波に備えた「安全な場所や家に住む(する)防災」を推進する必要がある。そのためにも地震や津波発生前の「事前防災集団移転事業」促進が求められる。想定災害と時代に即した防災対策へのシフトが防災大国日本における喫緊の課題となっている。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003